

テレビの志

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年2月26日

「今のテレビには志がない」。その文章の裏側からまるで怒声が聞こえてきそうだった。約10年前、この東京新聞に、牛山純一さんが亡くなる少し前に書いたコラムである。

牛山さんは、私がフリーになる前にいた番組制作会社、日本映像記録センターの代表だった。彼が日本テレビのプロデューサー時代につくったのが『南ベトナム海兵大隊戦記』である。1965年、アメリカが北爆を開始した年、このドキュメンタリーは第一部を放映後、予定していた二部、三部が放映中止となり、大きな社会問題となった。

当時日本では、ベトナム戦争はまだ、共産主義をたたき“聖戦”であった。でも牛山さんたちは、グエン大尉が率いる南ベトナム軍に従軍し、“ベトコン”の疑いをかけられた村人が射殺されその生首が目の前で転がるなど、報道されなかったベトナム戦争の内側を知らせた。表向きは残酷だという理由であったが、政治的圧力がかった。

新人の研修で、初めてこの作品を観た。命乞いをする農民を平然と殺した若い兵士が、すぐ後に優しく小鳥をなでている姿は、戦場の狂気を見事に現したものだだった。

その牛山さんにしつこく言われたのが「“署名番組”を作れ」だった。その頃は新聞も、署名つきは一部の特別な記事だけであった。つまり自分の作ったものに誇りと責任を持って、他の人には出せない個性を出せ、ということだ。

誰しもデータを捏造したり、政治家の圧力に屈したりするつもりで、番組を作り始めたわけではない。志を持ち続けるのは大変なことだ。でも今、一人一人がそれをしなければ、まさにテレビの危機だと思う。